

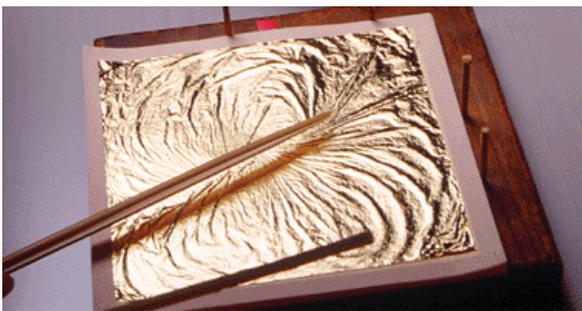
金箔

どうすれば金を薄く、きれいに延ばせるのでしょうか？

金属を薄く延ばしたものを「箔」といいます。「金沢箔」は、安土桃山時代に加賀藩（現在の石川県、富山県などを治めた藩）の礎を築いた前田利家の命によってつくられたのが発祥と伝えられ、日本の金箔（純金箔）の総生産量の99%以上を占めています。

金は、美しい光沢を持つことから、仏像や神社仏閣の装飾などに古くから用いられてきました。また、非常に酸化（物質が酸素と化合すること）しにくいいため、腐食などから保護する役割も果たしています。金は金属のなかで最も延ばしやすく広げやすい性質があり、金箔の厚さは $0.1 \sim 0.2 \mu\text{m}$ ¹⁾くらいです。金箔は、純金に微量の純銀および純銅を混ぜた合金からつくられ、それらの金属の含有率によって異なる色の金箔になります。一般的に使われるのは「4号色」と呼ばれるもので、純金94.438%、純銀4.901%および純銅0.661%からなる合金でつくられた金箔です。

初めは厚さが5mmくらいある金合金



を、ロール圧延機で厚さ約 $50 \sim 60 \mu\text{m}$ まで延ばします。これを約6cm角に裁断し、「澄打紙」という極めて特殊な手漉きの紙に1枚ずつはさんで「袋革」で包み、「澄打機」で約21cm角、厚さ $1 \sim 2 \mu\text{m}$ まで打ち延ばします。これをさらに11または12の小片に切り、「箔打紙」という紙にはさんで「袋革」で包み、「箔打機」でさらに薄く打ち延ばします。

伝統的な箔の製法である「縁付」に用いられる箔打紙は、藁の灰汁、柿渋、卵白などを調合した液体に、手漉きの雁皮紙を浸しては乾かし、機械で打つという作業を何度も繰り返してつくられます。この箔打紙の仕込みが金箔の出来栄を左右するとすう言われます。繊維がやわらかく表面が滑らかな箔打紙を用いることによって、金箔にシワがよらず、きれいに延びるのです。なお、この紙には脂を吸収する性質があることから、箔打紙としての役目を終えたものが「金箔打紙製法あぶらとり紙」²⁾として販売されています。

近年では、大量生産が可能でより低価格であるなどの理由から、特殊なカーボンを塗布したグラシンを箔打紙に用いる「断切」と呼ばれる箔の製法が主流となり、汎用の仏壇、工芸品等に使われています。また、「縁付」によってつくられた金箔は、主に神社仏閣や高級仏壇、文化財の修理などに使われています。（平成23年2月）

- 1) $1 \mu\text{m}$ （マイクロメートル）は、1,000分の1mmに相当します。
- 2) 石川県箔商工業協同組合が定める「金箔打紙製法あぶらとり紙」の条件を満たすものとして認定されたあぶらとり紙には、「金箔打紙製法」マークが表示されています。



協力：石川県箔商工業協同組合